

「悔い改めない町を叱る」という小標題が掲げられます。本日の箇所は、先週学びました2節以下の16～19節に描かれるヨハネとイエスの振る舞いの対比の延長として編集されています。簡単に言えば16節以下の主旨は、人々がヨハネにもイエスにも組みすることなく、ヨハネ教団の禁欲的な姿勢には「悪霊に取りつかれている」と批判し、初代教会の働きに対しては「大酒飲み、罪人の仲間」と好き好きに揶揄する傍観者的立場が述べられました。▼マタイはこれらの記事の継続として本日の箇所、批判はするくせに悔い改めようとしないガリラヤの人々の姿勢を厳しく取り扱います。彼らの初代教会への批判は前述した「罪人の仲間」であるという点でした。これはイエスの奇跡への非難に他なりません。なぜなら、イエスの奇跡とは「罪人の仲間」であるという宣言行為だったからです。ですから、「数多くの奇跡の行われた町々」(20)、「コラジン、ベトサイダ」(21)、「カファルナウム」(23)というガリラヤ地方の町々に対する「叱り」(20)の言葉が記されます。彼らには終末の審判の時に滅び去る運命を免れ得ないと当時の初代教会が持つ最大の非難の言葉を浴びせます。

このイエスの言葉(21-23)はQ資料から採り入れられています。ここではガリラヤ伝道で期待した成果をあげられなかったどころか、さんざんな目に遭ったQ資料グループの苦い経験が反映されています。これらの町々はもう悔い改めの可能性すらないと完全に見限られており、そこでの初代教会の働きは完了してしまっているとマタイは記します。しかし、17章24節ではまだカファルナウムは初代教会の根拠地の一つとなっており、食い違いが見られます。おそらくガリラヤで迫害されたごく初期のQ資料グループが働きの対象を異邦人(罪人)に方向転換せざるを得なくなった時点での言葉かと考えられます。

ベトサイダはガリラヤ湖北岸の漁業の町でした。ペトロ兄弟の出身地(ヨハネ1:44)です。コラジンは現在では不明ですがカファルナウム近郊の村かと思われれます。他方、ティルスとシドンは旧約の昔から異教と不道德の町であり、その

風習や文化は悪影響しかもたらさないとされていました。これらの町の方がまだましだとQ資料グループの言葉をマタイは用いるのです。なぜ彼ははそうしたのででしょうか。それは断ち切ってしまったことに対する自己批判への促しなのです。悔い改めとは、一方的に断ち切るのではなく、理解することだと語るのです。それがイエスの福音の初めであるとマタイは語ります。ですからカファルナウムも根拠地の一つとして用いられているのです。

他者を理解するとはどういうことなのでしょう。その人の過去を熟知し、現在を明確に把握し、未来も的確に予見し得るほどの正確さで相手を知ることでしょうか。またその人の力量を数値化して有用に用いることでしょうか。

もし自分自身がそのような正確さで計られたとしたらどうでしょう。愉快的な思いはしないはずです。なぜならば、そこに誤りを許し、悲しみを慰めてくれるようなものがなければ、かえって無理解さを味わうばかりかと思うからです。理解とは相手をそのまま肯定することです。良いも悪いもひっくるめてです。肯定の構えが正確な把握を理解へと深めるのです。これを「悔い改める」というのです。